

2018年度 大学院奨励研究員研究報告書

2019年 3月28日

関西学院大学学長 殿

奨励研究員

氏名	智原 あゆみ	印
----	--------	---

指導教員

所属・職名	社会学部 教授	
氏名	阿部 潔	印

以下のとおり、報告いたします。

研究課題	現代日本社会における承認意識の研究--計量社会学的手法を用いての アプローチ--
採用期間	2018年 4月 1日 ~ 2019年 3月 31日

研究科委員長・研究科長 印	事務局印

提出先：所属研究科事務室

研究発表状況（奨励研究員採用期間内に発表したものおよび、近く発表予定のもの）

（１）学会誌等への発表（著者、発表論文名、学会誌名、巻号、発表年月、掲載頁等）

雑誌論文	著者名		論文題目			
	雑誌名			巻号	発行年月	掲載頁

雑誌論文	著者名		論文題目			
	雑誌名			巻号	発行年月	掲載頁

図書	著者名		論文題目			
	書名			発行年月	頁	
					総頁：	
		担当箇所：				

※論文題目：共著の場合の担当部分のタイトル

（２）学会発表（口頭・ポスター：学会名、開催地、発表論文名、発表年月日等）

学会名		開催地	
題目		発表年月日	

学会名		開催地	
題目		発表年月日	

学会名		開催地	
題目		発表年月日	

研究経過状況（3000字程度）

本研究の目的は、「承認意識」の分析を通して現代日本社会における承認の特徴を明らかにし、その承認がどのような社会構造のもとで成り立つのかを考察することであった。

2018年度は、

- ①現代日本社会における承認意識の規定要因に関する投稿論文の執筆
 - ②承認に関する雑誌記事のテキスト分析に向けたデータ整理作業
 - ③フランクフルト学派と日本の社会意識論に関する先行研究のレビュー作業
- 以上3点を具体的な研究課題とし、研究に取り組んだ。

①現代日本社会における承認意識の規定要因に関する投稿論文の執筆

現代日本社会において対人関係の問題として注目を集める“承認”について、人々がそれをどのように感じているのかという“承認意識”に着目したうえで、その規定要因の検討を試みた。分析枠組みを設定する際には、社会哲学分野の代表的な承認論の論者であるアクセル・ホネットの理論を検討し、それを踏まえる形で分析モデルを設定した。分析方法としては、計量社会学のアプローチを用いた検討を行った。

ホネットの承認論では、承認のモデルとして愛・法・連帯の3類型が提唱されており、各類型において、承認をする他者との関係性や、他者を承認する際の価値評価基準が区分されている（Honneth 1992=2014）。本研究では、ホネットの承認モデルにおける承認をする他者との関係性に注目し、承認意識を「周囲からの承認」と「社会からの承認」として操作化を行った。さらに、ホネットの承認論では各モデルによって価値評価基準が異なることが指摘されているため、それらを踏まえた仮説を設定し、現代日本社会においても「周囲からの承認」と「社会からの承認」とで承認意識の規定要因が異なるのかを検討した。

分析モデルは、従属変数として「周囲からの承認」と「社会からの承認」を、独立変数として、社会経済的地位に関する変数（教育年数、雇用形態、年収）および社会関係に関する変数（婚姻状況、悩みごとの相談相手の人数）を投入した。分析手法としては、重回帰分析を採用した。

分析の結果、悩みごとの相談相手の人数という親密な他者とのつながりが両方の承認において影響を与えていることが確認された。この結果から、現代日本社会における承認意識においては、承認する他者との社会関係に拘わらず、親密な他者とのつながりがあるかどうか重要である可能性が示唆された。

（①については、2018年5月末に『ソシオロジ』に投稿を行っており、現在査読者とのやり取りを行い、論文の修正・リプライに取り組んでいる段階である。）

②承認に関する雑誌記事のテキスト分析に向けたデータ整理作業

承認論は、欧米圏では1990年代初頭頃から多文化主義（Taylor 1994=1996）やジェンダー（Fraser 1997=2003）といったマイノリティに対する制度の問題が中心として議論されてきたが、一方で、2000年代以降の日本社会では対人関係をめぐる問題を中心とした欧米とは異なる文脈での議論が多く展開されてきた。承認の概念が日本社会においてどのような文脈・意味で用いられてきたのか、及び、それらと各時代の社会構造との関連を検討するために、時代の潮流を反映しやすいと考えられる雑誌記事を対象とした、承認に関する雑誌記事のテキスト分析に取り組んだ。

まず、承認が主題として取り上げられた雑誌記事をWebデータベース（Web OYA文庫）によって抽出し、その結果をもとに雑誌記事を収集した。さらに、それらの記事について、記事の書かれた時期／記事における議論の対象／記事における議論の内容について検討を行った。その結果、①承認に関する雑誌記事は2000年代以降継続的に取り上げられていたこと、②承認が論じられる際の議論の対象は、その多くが各時代の「若者」であったこと、③承認に関する議論は、誰かを承認することの重要性ではなく、誰かに承認されることの重要性に重点が置かれていたこと、が明らかになった。

分析によって上記の点は明らかにされたものの、これまでの分析で明らかになった各点がどのような対応関係にあるかに関しては、検討が行えていない。それらを検討するために、統計的なテキスト分析の手法を用いて、より精緻な分析を進めることとした。

統計的なテキスト分析を行うための分析データの作成・構築作業は2019年3月末でおおむね終えている。現在は分析ソフトを用いた基礎的な検討に取り組んでいる段階である。今後、テキスト分析の手法である共起ネットワーク分析などによってそれぞれの対応関係に関してより精緻な検討を進め、現代日本社会の承認の様相を解明することを試みる。

(②の分析結果については、分析終了後論文として執筆し、発表することを予定している。)

③ フランクフルト学派と日本の社会意識論に関する先行研究のレビュー作業

博士論文では、現代日本社会における承認の問題を社会意識の視点から捉え、それを計量的な手法を用いて明らかにすることに取り組んでいる。それらの博士論文全体での位置付けを明確にするため、承認に関する議論、および、社会意識論に関する先行研究のレビュー作業に取り組んだ。

承認に関する議論については、博士論文で承認に関する理論枠組みとして中心的に用いるアクセル・ホネットがその一員とされるフランクフルト学派での経験的研究の位置付けに関して検討を行った。文献を検討した結果、現在のフランクフルト学派はその哲学や思想の面が注目されることが多いものの、その初期においては思想・哲学的な研究だけでなく、経験的研究も同様に重視されていたことが確認された。

社会意識論に関しては、戦後日本社会での社会意識論の系譜について検討を行った。検討の結果、日本の社会意識論においては、フランクフルト学派も基礎としているK.マルクスの思想がその土台にあること、また、フランクフルト学派の主要な研究成果のひとつである権威主義的パーソナリティに関する研究に関しては、日本の社会意識論においても一定の研究蓄積があることが確認された。

以上の点から、現在のフランクフルト学派の代表的な論者の一人であるホネットが展開する承認に関する議論についても、経験的研究である計量的なアプローチを用いて検討していくこと、また、現代日本社会でホネットの枠組みを用いて承認の問題を検討していくことには一定の妥当性があると考えられる。

今後の課題としては、心理学や経営学等の領域も含めたより幅広い分野の承認に関連する先行研究を検討したうえで、博士論文で論じる承認の問題の位置付けをより明確にしていく必要があると考えられる。

今後の見通しとしては、課題②、および、課題③を終えたうえで、博士論文全体の整合性を整える作業に取り組む。そして、2019年度秋学期中の博士論文の提出を目指す予定である。

以上